
仮面の僕

イラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面の僕

【Nコード】

N2838F

【作者名】

イラル

【あらすじ】

仮面をつけたのが当たり前の世界。そこでは五年に一度仮面を変えるのだが、少年は3歳のときに変えてしまった。そこからその仮面との付き合いが始まった。外れない仮面。外れたとき少年は……。

仮面。それはつけるのが当たり前。

僕も生まれたときに親が選んでくれた仮面をつけている。

それがこの世界の当然。当たり前。

それがこの世界に生まれたという印。

仮面は5年立つごとにお祝いとして新しいのに付け替える。

けれど、僕は三歳の頃に誕生日祝いとして自分の好みの仮面を買ってもらった。

そのことはよく覚えている。

仮面がずらりと並んでいて、その中で一際僕の目を引いた笑顔。別にかっこいいとか可愛いとかそういう感じの笑顔じゃなかった。むしろ不気味に笑うその仮面。

それに導かれるように僕はその仮面をとって顔につけていた。

仮面はずっと僕に溶け込み僕の顔となる。

まるで元々僕のものだったように。

それから二年。5歳の時だ。

仮面を変えないといけないのに僕は嫌がった。

外れなかったから。

よくわからない。なんで仮面が外れなかったのか。

どんなに引つ張ってみても、擦ってみても、外れない。傷つかない。父さんは不吉だと、母さんは五歳になる前に変えたからよ。と。

二人とも言い合い喧嘩した。

僕は、きつと十歳になったら外れると。そう言った。

まだつけてから5年経ってないから。だから外れないんだと。けれど、十歳になってもこの仮面は外れなかった。

僕の顔の上ですつと不気味に笑んでいる。

僕はおびえていた。この仮面がいつまでも外れないことに。

親も友達も先生もおびえていた。この仮面に。

18 になつた時だつた。

僕の顔がおかしくなつた。痛い。

とてもつもなく顔が痛くなつたのだ。

激痛に叫びむせび泣いた。

けれど誰もこない。来たくはないのだ。

僕の仮面をおそれるあまり。

誰か助けてっ。

まるで口がないかのように叫べない。

涙もとめどなく流れているはずなのに、生暖かさが僕の頬を伝わることはない。

何故？

そう思つたとき、カタン。と音がした。

真つ暗になつた。

何故かはわからない。けれど真つ暗になつたのだ。

もう顔の痛さはない。

僕は暗闇を辿り足元を見た。

足は見えなかつた。

けれど、見えたものが一つ。

あの仮面だつた。

僕が10年間鏡で見続けてきたあの顔が白く浮き上がって笑んでいる。

僕は顔を触つた。

触つた感触はあつても手は見えなかつた。

見えるのは仮面と暗闇だけ。

手の感触は、つるつると肌を撫でるだけ。

顔を触つてははずなのに…何も無い。

感触は肌を撫でているさらさらとした感触だけ。

僕に顔がない。

それしか考えられない。

「やあ、こんにちわ。僕。」

仮面が僕の鏡のようにしゃべった。

「こんにちわ。僕。」

僕が答えようとする口は動く様子もないのに、どこからか声が出た。

どこからかはわからない。

けれど、そんな疑問よりもこれで彼と話が出来るという安心感が強かった。

「君は僕を君だと認めるのか？」

仮面は僕に問うた。

不気味に笑いながら。

その顔からは感情を読み取れない。

仮面なのだからずっと同じ表情なのは当たり前。

だけど、この面がずっとそうなのは何故か変なような気がした。

「……僕じゃなかったら君は誰？」

僕は仮面に言う。

仮面は笑んだまま答えた。

「今は君。」

僕は、ああやっぱり。と心の中で呟く。

この仮面は僕自身なんだと。

やっと見つけた自分。

それでも僕は少し、この自分が怖かった。

3歳の時に見つけたこの仮面。

この10年間で僕を吸い取ってたのではないか？

だから今この仮面は僕で、僕は僕ではないのではないか？

また何も無い顔を僕は撫ぜる。

自分の顔がない。

「ねえ。僕の本当の顔は？」

「知らないよ。」

「君がとつたの？」

「知らないってば。」

仮面が笑うのを止め膨れた顔をする。

おかしいね。仮面なのに表情が変わるなんてさ。

なんていうか、人と話してるみたいだよ。

「なんで？」

「知らないからだよ。僕は君の仮面だよ？知るわけじゃないじゃないか。でも、これだけは言える。僕が君から落ちたのは君の顔の凹凸がなくなっただけから。」

君は子供っぽいんだね。

膨れたまま拗ねたように僕から視線をそらす。

当たり前か。3歳のときの仮面だものね。

幼さが残るその顔。

僕から落ちた。その顔が言ってること、さっきまで僕の顔はあった

ってこと？

「僕の顔、さっきまであつたんだね？」

「うん。まあ、あたったね。僕と同じ顔が。」

「君と？」

「当たり前だろ？ じゃなきゃ僕は君から外されてるはずなんだから。」

「…嘘だよ。そんなの。三歳時、まったく違ったじゃないか。」

覚えてる仮面の顔。

不気味なその笑顔。

僕とははるかに違うものだった。

「顔は似てなくてもね。心が似ると外れないのさ。」

君は僕を否定したくて仕方なくなつたね？ そうだろ？」

「心なんて似てないよっ！」

僕は叫んだ。本当は叫べてないのに、心臓がどつきどきと鳴り響く。なんで？ どうして？ 僕がこの醜い仮面と一緒に？

疑問が頭の中を駆け巡って。それを否定したくて。

「君なんか僕じゃないっ。僕は僕だっ。」

「君って何？」

「え？」

「君って何？」

仮面が冷たい目を僕に向ける。

それは僕がしたことなんかない顔で、ひどく嫌悪感と吐き気を覚えた。

そして、その問いに僕は困る。

「僕は僕だっ。」

とりあえずそれだけを言った。他に言葉が続かない。仮面の視線に、僕は逃げ出したくて。でも、仮面から目を離せない僕がいる。

「じゃあ、僕は？」

「え？」

「じゃあ、僕は何？」

必死な目にな変わった仮面。僕を見上げるその目は。なんだろう果てしなく澄み切っていて、でも不安で濁りが生じている。

そんな感じ。

子供っぽくて、それは僕がしたことがある顔で。その心情は手に取るようにわかった。

ねえ？僕を否定しないで。そう言ってる。

「君は僕。だよ。そう。僕さ。」

僕はそう認めた。だって、あまりにもその顔が僕だったから。光が見えた。眩しくて目を細める。

仮面以外の。色が見えた。

仮面はあの不気味な笑みで僕の足元に落ちていて。

僕はかがんでそれを拾った。

それから手を顔にやって凹凸があるのを確かめると、僕は仮面を被った。

するりと溶け込む仮面。

僕は鏡の前に立ち、

「おかえり。」

とそう告げた。

仮面は前よりも大人びた。そんな顔で。

だけどいつもの不気味な笑みは変わらずに。

鏡の中にいた。

それからはいつも通り。

僕も20歳になった。

外さなければならぬ。

この仮面を。

仮面はあっさりと剥がれ落ちた。

あの笑みのままで。

僕は新しい仮面をつけた。最高に綺麗な笑みをした仮面に。

あの不気味な笑みとはまったく違う。素敵な笑みだ。

それから一年が経ち。僕はすっかりその仮面のことを忘れていた。

「やあ、久しぶり。」

僕はびつくりした。
僕がいた。

「あ……。」

あの仮面がいたのだ。
あの不気味な笑みのままで。
僕はその場に凍りついた。

カタン

落ちた。そして、暗闇と仮面。またあの空間が広がる。
それは、僕の顔がなくなったことを示していた。
慌てて顔を触るが何もない。

「どっ…して？」

「僕はもう君じゃないよ。」

仮面が僕に告げた。
仮面を凝視すると口がにたりと耳の方まで裂けた。
その君の悪いこといつたらない。
この世の終わりみたいなおぞましいその笑み。

「さようなら。」

その笑みでくくくと笑い別れを告げる仮面。
そして、僕の前から横に移動して、

後ろに移動して。

消えていった。

へたりと僕は座り込む。

なんだったのだろうか。今は。

そして、もう暗闇しかない世界。

僕はいったいどうすればいいのかと。

不安がこみ上げてきた。

僕はあの仮面の僕ではなくなった。

ただそれだけはわかる。

「さようなら。僕。」

そう告げたら。目もないはずなのに、生暖かい液体が僕の頬を伝った。

とめどなく。

止まらないその水の道。

この切なさはなんなのか。

苦しく締め付ける何か。

僕はやっと理解した。

僕はあの仮面の僕が好きだったのだと。

好きで好きで。仕方がなかったんだ。

けれどももう、僕は後戻りをできない。

彼には別れを告げたのだから。

彼はもう僕ではないほかの誰かなのだから。

僕は、自分を探さなければならぬ。

彼が他の誰かを見つけたように。

僕は足元に落ちたはずの新しい仮面を手探りで探した。

でも見つからなくて。

僕は。

仕方なく闇を歩き出した。

闇の中に見つかるかもわからないものを探して。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2838f/>

仮面の僕

2010年10月11日20時04分発行